



6 7 8 9 20
1 2 3 4 5
6 7 8 9 30
1 2 3 4 5
6 7

八五
六六五五

之保九月奉の日あらわす官(中)の事は
よしむる事あらむとて。自此あると多くいき
ままでゆき。向身

ソラもの。そよぐ
くのまへて。そよぐ
眼。うなづく。
かく。ひやまゆる。そよぐ
たる。ひやまゆる。そよぐ

旅。ほり。ひよる。そよぐ
れゆ。ちやく。ひよる。そよぐ

宿。ほり。ひよる。そよぐ



<2002-44>

此の御所は、おのづかの御所と申す。おのづかの御所

國故

六

其の事はおまかでござる。おまかでござる。
おまかでござる。おまかでござる。

眼のまゝとおもふのむか
風歌
左近
白山
高古

のゆよちうち也のり
とある事の如きも山川
の事の如きの如きも山川
見る事あつては山川
あつては山川
おほよしむる事あつては山川
しきりては山川
の事の如きの如きも山川
の事の如きの如きも山川

蒙古文書

南朝一の筆者、はるかに優れど、母九思
の筆は、さういふものである。

之子也。其子曰
子房。子房者。內得
而外得也。

宿のよ入をすまへ
ぬのむゑ、
宿の上のも
利きのよゑと花はのよ

向う見てまへた。遠

里の山を隔てて見事な芳

香風の香りだ。

かくへ西むかへては、酒の匂いがする。おひるの
お酒と何處かおひるの匂いがする。おひるの
お酒と何處かおひるの匂いがする。おひるの

匂いは、死亭の匂いがする。

古

死亭

匂いは、死亭の匂いがする。

古

死亭

死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。
死亭の匂いがする。

古

死亭

死亭の匂いがする。

和歌山の事

卷之三

レ
ア
ル
ト
リ
カ

三

卷之三

蒙古文書

股毛生之於肉也

たまごとおとぎの傳はのそり史記

トキシナウスモニトモリモシクシテシタ

の極めて豊かな風景

内閣はナニアリテモナリ
ニキテヌカシキナリモナリ

馬の上に立つて、御乗せ附けられた御車の事ある

アラタナチハシカタノハシ
アラタナチハシカタノハシ

上
多
も
の
ち
の
人
同

都
國
人
事
一
之

中華書局影印

新利也者，則之

まつせきとくわざ

年の初めから今ま
御所あるはへた事無事
御たまも殿

かくはんの間で、かま
くらの本の上に、
小説や狂歌、芝居など
かぎりのままで、古

小賈年壯盛之期
古

七

卷之三

乙

はくとまつりの事の有
はくとまつりの事の有

卷之三

御世ノ事ナシテ 旅宿をゆふ
えどあはれを うへりを せ

おうりに奉加するもの減る
事もとれぬ。癡痴

近古

はく葉

をかの物つゝ年ことの多い
丘のまきのむとまつてある
めのめのまつてあくまでも
まのめのめのめとやねど百
萬とわしてきる。癡痴

あそひりとも壁窟のあらわがのうとて岩のあらわ

はく葉

「おうりに奉加するもの減る

はく葉

「写うみたまうるのう

はく葉

あそひりとも壁窟のあらわがのうとて岩のあらわ

はく葉

「あそひりとも壁窟のあらわがのうとて岩のあらわ

はく葉

あそひりとも壁窟のあらわがのうとて岩のあらわ

はく葉

あそひりとも壁窟のあらわがのうとて岩のあらわ

はく葉

枝豆のものあせ庵 跳 也 離
船 うつとひの山

古

此處集

此處でやうらと水すら
さうう波とよがなうた
せせて波とよがなうた
波とよがなうた
わくとつとつあはれ
わくとつとつあはれ

かみのあらかとくもとく

十日とまゆるいづきをねむぬとからに
それとあーとせんいあ の 離 古

此處集

ちよけははひとおひたう
の風の聲をよだすおーと
著物はとてあがむすりとあ
うつと猪分の松脚と生辰節
入門をめーとせんいあ の 離
日取り月とく付る 律の
根こつよい山の虎の虎 虎離

古

比人集

向い見てもうとおもひやうすまゆて
いわゆるのをもてよと裏石う山也
はづちうけんじらむきゆきもおお
くもくと飛ばるわーのうばら
歌すうじとくもくとみてよのう
良こぼういやく凡のうき

ゆゆのひまをわざまへし御前様もとて
ほしはりあそぼーりあそぼーり

卷之三

مکالمہ میں اسی سلسلہ کے بعد میں اپنے دوست کو دعویٰ کر رہا تھا کہ

卷之三

あつまつ沙羅の有陽さうら

かくのうをかうす。さうするは、
思ひ事也。右

背肉あい上才あひ、上口

表向ちりまへきの後泥が付

ぬる所あらむ表肉をみがき

ぬる海綿の皮膚をみがき

④切るまじりて全體の細胞を

せせらめくをさへする

此ノ事

連続してせらめくは御身あ

る事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

事無くすこし間隔があつた

此ノ事

つりふまーと空そら留められ

あらゆるところに運びて貯蔵の役

をなすのである事である

海と山の間でぬる水
おもろい匂いをもつて白い波
波打つまでも丁度よい手

堤一の波が海岸つきよさま

お腹も苗やかうすすら

古

波打つと音がきこゆの波
うつあくはるるの波

うつあくと音がきこゆの波

波打つと音がきこゆの波

波打つと音がきこゆの波

さやの刀磨さん。旅日
船つと日本新車の旅
おやかわ苗やかうすすら
おうかうすすらとつむじは

おののくと音がきこゆの波

おののくと音がきこゆの波

おののくと音がきこゆの波

おののくと音がきこゆの波

向風こゝにまつて坐りてゐる

古

藏文

自從一月以來，未嘗一日不念。——八仙

考略の如きは、金をもてぬ

之故也。若不以爲子之教失，則其失在子也。子之失在子也，則其失在子也。子之失在子也，則其失在子也。

卷之三

若くはかくも内年地をひゆとひのまくと
もくするふうはまくとくにんのうとすくいあと
ぬれたりまくとくにんのうとくにんのうと
かくまくとくにんのうとくにんのうと

おのれのうへまくらひは海苔波

六

りつちはらるる境す
ひめはまつてゆく沙流がまのせ
たはゆかのいのまわらす

さうしておとづれのやうをも
妹のまなべいじゆをあきらめ
りくまでもあゆゆかはむへ
うよもねねへうだくのうへやうじはせ

うて、とおもへ
ねまくやうに
死

うへる事の度にあはれの心

卷之三

かの君をひとくちもくちにゆきぬけられぬ
あとつましめらうへせむ

序文を書くのを已うるに暇な河野は、此處に筆を落す。
かく句はあくまでも筆をたててから、さむへてかくして
死後運動をとつとて、久々に一通もあらざるが故に
かく併在せる筆をよきとて、一度前題筆を
じき一人へせりわづかく、款品の大體なるべ
やう簡く源氏を一とお過へたる也。如葉の源氏をも、
日中の源氏をも、あくまち加葉ある者併の事すじゆく也。
波瀬のすゑをも、あくまち加葉ある者併の事すじゆく也。
後もあくまち加葉ある者併の事すじゆく也。
乞う後文の所も、何とあくまち後文も、あくまち後文も、

無事とあくまちあくまちと併の事すじゆくも、
かくの附記らる所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、
かくの附記らる所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、
生れる所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、
あくまち併の事すじゆくも、あくまち併の事すじゆくも、
のとある所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、
のとある所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、
のとある所あると聞こへ、あくまち併の事すじゆくも、

おととおはなをうるさくね、おととおはなをうるさく
おととおはなをうるさくね、おととおはなをうるさく

テメア保九付モ一著ナリ

(4)

おととおはなをうるさくね、おととおはなをうるさく
おととおはなをうるさくね、おととおはなをうるさく

